別紙様式２

上越教育大学研究プロジェクト　終了報告書

研究代表者　所属・職名　音楽分野・教授
氏　　名　　尾﨑祐司
研究期間　令和４年度～令和５年度

研究プロジェクトの名称	「音楽的な見方・考え方」を深める郷土芸能の授業開発
研究プロジェクトの概要	本研究の目的は、教科教育がコンテンツ・ベースからコンピテンシー・ベースに転換したことを受け、音楽科の授業における「何のために学ぶのか」という意味を明確にした授業を開発することにある。平成 20 年告示の学習指導要領以前は教材曲のジャンルの多様化を目指してきたが、平成 29 年告示の学習指導要領では、教材曲の扱い方に児童生徒の生活上の文脈と関連付けられているのか、主体的に学ぼうとする意欲や学習後の社会とのつながりを実感できる効果が期待されている。しかし、教材曲の多様化によって郷土の芸能や音楽の素材の研究は深まったが、実践場面では何を学習課題に設定し、社会とのつながりを実感できる学びとするのかという授業の理論と実践の往還は課題が残る。そのため、従来のように音楽構造の分析や動画を鑑賞した音響的な印象を漠然と述べる「絶対的表現主義」ではなく、歴史上の当事者の感情を想起しながら音楽の意味を喚起する「参照的表現主義」による鑑賞の授業の開発が具体的な研究の意義になる。この「参照的表現主義」の聴き方によって、太鼓のリズムが始めはゆっくり、次いでやや早く、最後は最も早く打ち切る。すなわち、序・破・急の三段で打ち、これを何回も繰り返す、という演奏の意味の探求が「音楽的な見方・考え方」による思考活動となり、この郷土芸能を学ぶ意義の理解につながる成果が期待できる。
研究成果の概要	石川県輪島市の御陣乗太鼓保存会の北岡周治氏に、現在の御陣乗太鼓の演奏様式が確立した経緯などインタビュー調査した。また、浅野太鼓楽器店（石川県白山市）に保管していた御陣乗太鼓の中古品を研究目的で購入のお許しをいただいた。実際に使用されていた御陣乗太鼓から、その特有の甲高い音色とその音色の音量（dB）を確認した。また、文献資料として、『たいころじい』第 31 巻（2007 年 7 月号）（浅野太鼓文化研究所）、『季刊横笛』（1988 年）に掲載の前田利祐氏による五線記譜の楽譜を収集した。中学校での授業計画は、金沢市立金石中学校の森英玲菜教諭（共同研究者）が学習指導案を作成した。授業は令和 5 年 3 月 3 日に授業を実施した。しかし、「学びに向かう力、人間性等」の趣旨に沿った発問と、御陣乗太鼓の三段打ちの体感といった音楽的特徴と結び付けた成果を得られなかった。そのため、授業を省察し授業計画を再立案し、令和 6 年 2 月 14 日に再度実施した。折しも、能登半島地震が発生した直後であったため、地域の伝統芸能を学ぶ意義について深く認識する結果につながった。
研究成果の発表状況（※今後の予定も含む。）	日本音楽教育学会の紀要「音楽教育学」等に投稿する予定。

学校現場や授業への研究成果の還元について	「地域の伝統芸能」の教材化を構想する際に、考え方の方向性を提案できると考えている。